

指導資料

鹿児島県総合教育センター

生徒指導 第56号

— 小、中、高、特別支援学校対象 —

平成21年5月発行

児童生徒のやる気を引き出す生徒指導

— コーチングの考え方を生かした指導を通して —

核家族化や少子化、情報化などの社会の変化に伴い、児童生徒一人一人の抱える不安や悩み、課題なども多様化かつ複雑化してきている。その中で、教師の自らの経験に基づいた指示的・指導的な対応だけでは、こうした児童生徒への援助が困難になってきている。

コーチングの目的は、児童生徒との信頼関係を築き、やる気を引き出し、自発的な行動を起こさせることであり、このことは、生徒指導の目標である「自己指導能力」をはぐくみ、児童生徒の「自己実現」を援助することと相通じるものである。

児童生徒は、本来、「自らよりよく成長しようとする存在」である。児童生徒のやる気を引き出すことは、学校で学んだ知識や技能を自己指導能力に発展させていく原動力と考える。そこで、本稿では、コーチングの考え方を生かした児童生徒のやる気を引き出す生徒指導の進め方について述べる。

1 児童生徒の実態から

平成18年度、当教育センターで児童生徒を対象に「学校生活や悩みに関する実態調査」を実施した。

その中で、「進学・就職等に関してあな

たのもつ不安や心配事は何ですか」（複数回答：中・高等学校1952人を対象）という質問に対して、「志望校に合格できるか」や「勉強が大変」、「将来何をしたらいいか」など、多くの生徒が将来の目標等に不安を抱えている状況がみられた（図1）。

また、それに対する教師に求める援助として、「相談にのってほしい」、「話を聞いてほしい」などの回答が多かった。

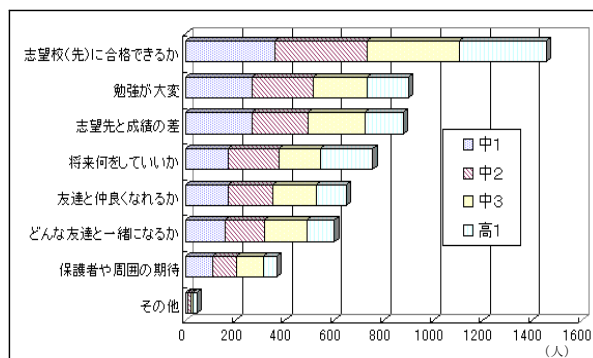


図1 進学・就職に関する不安や心配事

しかしながら、児童生徒は、周囲からの援助に頼るだけでなく、様々な課題に対して自発的、自主的に立ち向かうことで、解決したという達成感や成就感を味わう経験が大切である。したがって、教師には、この視点に立ち、目標をもたせたり、やる気を引き出したりするなど、児童生徒の自発性を促す生徒指導が求められている。

2 コーチングの流れと生徒指導に生かす コーチングスキル

コーチングの考え方に、①答えはその人の中にある、②人は無限の可能性をもっている、③一人より二人の方が答えを見つけやすい、という三つの原則がある。

ここでは、この原則に基づいた学校における一般的なコーチングの流れ（6つの段階）と生徒指導に生かすコーチングのスキルについて示す。

(1) コーチングの流れ

① 信頼関係づくり

信頼関係づくりのためには児童生徒とのコミュニケーションが重要である。教師が児童生徒の話を十分聴き、認めることを繰り返すことで、信頼関係が築かれる。その信頼関係を基に、児童生徒は、苦しい思いや自分の考えを話すようになる。

② 現状把握

児童生徒との信頼関係を基に、児童生徒の話に耳を傾け、目標に対する悩みや不安、課題などの現状を把握していく。

③ 目標設定

現状把握の後、児童生徒の目標やなりたいたい自分、解決したい内容を聴いていき、実現できるイメージがもてるようにする。

④ 課題の把握

児童生徒の実現したい目標を設定していくことで、児童生徒の課題が見えてくる。その課題について児童生徒自身に認識させたり、考えさせたりする。

⑤ アクションプラン

課題解決のために、何ができるか、そのための必要な行動には何があるか、具体的なプランを考えさせ、実行させる。

⑥ フィードバック

児童生徒の行動を最後まで観察する。成果等が不十分な場合は、もう一度①から⑤を見直し繰り返す。

(2) 生徒指導に生かすコーチングのスキル

生徒指導に生かすコーチングの中で、特に活用していきたいのは、信頼関係を基にした傾聴・質問・承認のスキルである。

ア 傾聴

児童生徒との信頼関係づくりは、話を聴くことから始まる。コーチングでは、7：3くらいの割合で話を聴くことを中心にし、児童生徒の話を心から聴くことが大切である。

話を聴く際の必要な技法として、以下の五つが挙げられる。

○ 共感的理解

児童生徒の気持ちや経験などを自分も同じように感じたり、理解したりする。教師は、中立的な姿勢で聴き、自分の感情をコントロールする。

○ 相づち

児童生徒の話をただ聴くのではなく、うなずいたり、「ふうん」、「へえ」、「ほお」など相づちを打ったりしながら聴く。

○ おうむ返し

児童生徒の言葉をそのまま繰り返すことで、児童生徒には信頼感と好意の念が生まれやすい。また、「つまり～」、「言いたいことは～」など児童生徒の話の中から、キーワードを見つけて適時繰り返す場合もある。

○ ペーシング

人は自分に近いほど安心感を抱き、共感的理解を示しやすい。教師は、児童生徒の話す、スピードやトーンなどのリズムを意識し、相手に合わせて話し方を変化させる。

○ Yes And

話を聴くポイントとして、「子どもの話を最後まで聴く」、「子どもの発言を否定しない」ことなどが挙げられる。「Yes And」で「なるほど……、それでは……」と、児童生徒の話したことを受け入れて、一言だけ教師の考えを付け加える。

イ 質問

コーチングにおける質問には大きく分けて次の3種類がある。

児童生徒とのコミュニケーションの中でこの3種類の質問を活用しながら、児童生徒自身の自分の長所や能力への気付き、自発的なやる気を促すことが大切である。適切な質問により、考えることになり、考えることで気付きが生まれやすくなる。

○ 特定型質問と拡大型質問

【特定型質問】

「はい」と「いいえ」、「上」と「下」のように誰もが同じ答になったり、一言二言で答えられる質問。

【拡大型質問】

答が複数あり、「はい」、「いいえ」のように、どれか一つに特定できないような質問。

○ 過去型質問と未来型質問

【過去型質問】

質問の中に「過去形」の言葉を含んでいるもの。例えば「今まで、どうだったんですか。」など。過去の成功体験を想起させたり、原因を探ったりするときに使う。

【未来型質問】

質問の中に「未来形」を含んでいるもの。例えば「次は何がしたいの」など。児童生徒の意識を「過去を振り返る」ことよりも、「今後どうしたいか」に向けさせた方が、改善の可能性は拡大する。

○ 否定型質問と肯定型質問

【否定型質問】

質問の中に「～ない」という否定の言葉を含んでいるもの。例えば、「どうして掃除をしないのか?」とか「どこが分からないのか?」など。現在の状況に安心している子ども、実現不可能と思込んでいる子どもに使う。

【肯定型質問】

質問の中に肯定型の言葉を含んでいる（「ない」という否定の言葉を含まない）。例えば、「どうしたら掃除ができるの?」、「どこが分かっているのか?」など。児童生徒を前進させようとする場合に使う。

ウ 承認

承認とは、相手の存在そのものを認め、教師が感じた承認のメッセージを言葉にして児童生徒に伝えることである。取組の結果が出たときだけでなく、取組の過程も承認することが大切である。

児童生徒へのメッセージの伝え方として以下の三つが挙げられる。

○ Youメッセージ

主語を「You（あなた）」にしてほめること。例えば「君は部活動を頑張っているね。」、「今日は表情が明るいね。」など、「あなたは～です。」というような言い方をする。内容は伝えることができたとしても気持ちは伝わらないことがあるので注意する必要がある。

ほめる方とほめられる方の上下関係を感じさせてしまうことがある。上から下へ相手を評価するニュアンスが感じられると、不信感や押しつけと受け取られやすい。

○ Iメッセージ

主語を「I（私）」にしてほめること。児童生徒に対して、「私」はどう思っているかという主観的見解を伝えること。例えば「今日はしっかり後片付けをしてくれて、先生はうれしいな。」、「君なら安心して、任せられるよ。」など。

主語を私にしてほめると、聞き手は「あくまで話し手の意見」として素直に受け入れることができ、押しつけられた気がしない。このときお互いの立場は対等で、気持ちがうまく伝わる。

○ Weメッセージ

主語を「We（私たち）」にしたほめ方。例えば、「学級の友達みんなが喜んでいたね。」など、「私たち」はどういう立場、状況、関係の中にいるのかを強調すること。

連帯感、一体感を与えやすく、学級やグループなどに仲間意識が生まれることで、児童生徒の所属感を高めることにつながる。

承認することは大切なことであるが、承認のみで終わらず、「どうしてうまくいったか。」などと質問し、更なる気付きを促すフィードバックが必要である。

3 児童生徒との対応場面の実際とポイント

ここでは、児童生徒との対応場面におけるコーチングの考え方を生かしたかわりの実際とその対応上のポイントについて述べる。

【進路相談場面（中学3年生）例】	対応上のポイント
教師：進路のことについてなんだけど？ 生徒：まだはっきり決めていないんですが、〇〇系の学校か△△系の学校のどちらにしようか迷っています。	迷っていることに関して、否定的にかかわるのではなく、共感的に認めることで、生徒に信頼感や安心感を与える。また、生徒の話のペースに合わせる（ペーシング）。
教師： <u>そうなんだ、迷っているんだね。</u> <u>将来は、どんな仕事をしたいと思っているの？</u>	過去型の質問により、生徒自身の欲求や興味・関心を意識させる。
生徒：・・・、まだ考えていません。	
教師： <u>小学生の時は、何になりたいと思っていたの？</u>	生徒の回答に対して、「Iメッセージ」で教師の気持ちを伝えながらさりげなく賞賛する。友達からの評価を「Weメッセージ」として伝える（承認）。 また、教師からの客観的で肯定的評価や共感的な理解は、生徒自身に安心感と自分を振り返るきっかけを与える。
生徒：小学生の時は、消防士になりたいと思っていました。	
教師： <u>ほう、消防士。</u> <u>どうして消防士になりたいと思ったの？</u>	「Yes And」の聴き方。「なるほど」と生徒の話をまずは受け止め、その後教師の考えを提案する。そうすることで、生徒は自発的な行動を起こすようになる。 また、「一緒に調べよう。」という声掛けで、生徒の不安の軽減を図る。
生徒：テレビで人命救助の様子を見ていて、自分も人の役に立つ仕事をしたいと思っていました。	
教師： <u>なるほど、人の役に立つ仕事をしたい、すごいな。</u> <u>小学生でそんなことを考えていたなんて。今でも、クラスのために頑張ってくれているよね。友達からの信頼も厚いよね。先生も気付いていたよ。!</u> <u>将来の仕事に対する今の思いは、どうなのかな？</u>	
生徒：やっぱり人の役にたつ仕事、人から喜ばれる仕事に就きたいかなあ・・・。	
教師： <u>そうか。それじゃあ、人の役に立つ仕事をするためにどんな進路の選択肢があるのか、情報を集めて調べる必要があるんじゃない？</u>	
生徒：そうか・・・。どうやって調べればいいですか？	
先生：それじゃ、まずは、先生と一緒に調べてみるか。	
生徒：ありがとうございます。急いで調べて、早く志望校を決めたいと思います。	

※ 下線：傾聴（_：おうむ返し ~：相づち）
 □：質問 ■：承認

児童生徒に自己指導能力を身に付けさせることは教師の課題である。児童生徒が自ら課題を見つけ、自ら学び、考え、主体的に判断して行動し、よりよく課題を解決できるように指導していかなければならない。

近年の児童生徒の課題として、意欲の低下や将来の夢、目標の消失などが挙げられている。これまで述べたコーチングの考え方は、このような課題の解決に向けて有効な方法の一つであり、児童生徒の「生きる力」の育成

につながるものとする。

教師は、一人一人の児童生徒と積極的にかかわりながら「やる気を引き出す生徒指導」を進めていくことが大切である。

〔引用・参考文献〕

神谷和宏著「子どものやる気を引き出すスクールコーチング」
 2008 学陽書房
 千々布敏弥著「スクールリーダーのためのコーチング入門」
 2007 明治図書出版

（教育相談課）